

問答連 瓦版

その十四

哲学カフェ第三期

第四回 八月二六日(土) 二時から四時まで

「子ども」を考える

〈文化的視点から見た「子ども」〉

【ゲスト】 ジェームス・ケント さん

【ゲスト】 イザベル・ファスベンダー さん

【ゲスト】 参加者の皆さん

まず、ある本からの引用です。

「わたしはくれぐれも世の親達に忠告したい。学校に子どもを預けて教室に閉じ込めて読み書きを教えるもろったり道徳を教えるもろうことが大事な教育であるという迷信をお捨てなさい。そして、子どもが本当に要求する活動はなにかを見つけて、それを叶えられるような適当な方法、環境を整えてあげなさい。これこそ人間完成の最も必要な教育です」

いかがですか。どのように感じられたでしょうか。

種明かしをすれば、先の文は大正期に出版された『家庭及学校』という教育読み物の中の一説を、勝手に現

代風に書き直したものです。今でも、「なるほど、その通りだ」と納得できる内容にも見えます。

「子ども」は昔も今も変わらないし、大切に育てていかなければならない。また、「子ども」は健やかに育つものだ。と誰でも考えます。もちろんそうなのだろうと思います。けれども、そのことは文化の違いによって受け止め方も違っているかもしれません。英国流？独逸流？日本流？という具合に。多彩なゲストを迎えてどんな議論になるか楽しみです。

ゲストのイギリス人のジェームス・ケントさんは二児のパパさんです。ドイツ人のイザベル・ファスベンダーさんは一児のママさんです。そして、参加いただいた皆さんは、かつて「子ども」だった人です。



昭和3年10月号『コドモエホンブコ』より

僕達ノ夢

【今回の企画について】

今回は、参加していただく皆さんから「こんなことを話してみたい」と思われるものを話題に取り上げていきたいと思っています。ただ、漠然と「何かありませんか」ではなかなか上手く運びませんので、あらかじめ「子ども」をテーマに選んでみました。一口に「子ども」といつても、それぞれの立場によって見る視点は異なります。「今、子育ての真っ最中。どうしたらいいの」という人。「子どもの顔も見るのはいや」という人。「もう随分昔のこと覚えてない」という人。様々です。

「子ども」を考えることはとりもなおさず今の私たちを、また社会を見直すことでもあります。同時に、外国人の眼でみた日本の「子ども」を知ることは、私たちの「常識」を相対化することにも役立ちます。例えば、ジェームスさんは次のような「ハテナ？」を日本の生活の中で感じています。

日本では、妊婦は病人の扱い？と思うことも。子どもはどんな人でも皆「友達」だと思っけど、大人は子どもの周りに垣根を作ってしまうのはなぜ？ 結婚したとたん「子供は？」と言われてしまうのはどうして。結婚＝子どもなの。 政府は、子供を産んでほしいメッセージを出すけれども、それは正当なこと？ 等等。

またイザベルさんは、ジェンダー・フェミニズム的な視点で「子ども」や「子育て」を考えてみることは大切ではないですか。とおっしゃっています。
あなたも話題提供者になってみてください。

今よみがえる「ブツダのことば」

今回の対話で、一番印象に残ったことは、仏教、あるいは、宗教というものにまじめな関心をむけている人がたくさんおられるんだなあということ。僕自身は、キリスト教や浄土真宗、あるいは創価学会などで、なんらかの集団や仲間を支えられながら強い信仰を持っておられる人より、一人で迷いながら、でも宗教や倫理といったことに関心をもたざるをえない、そんな人の方に親近感を持ちます。仏陀の言葉を、自分を癒してくれる言葉として、ぼつぼつと拾い読みされる方、宗教と出会って、心が楽になったけれど、いろいろな迷いを捨てられないとおっしゃる方などなど。人間の心がいやでも、広い意味での宗教的な問いかけをせざるを得ない時、ある種の超越的な世界に近づかざるを得ないタイミングが、人生にはしばしば、あるように思います。そういうことから、ついて、気負わず、やわらかく、一緒に語り合える空間がほしいなあと以前から思っていました。日本人が自然に対して感じているある種の畏敬の念や帰属感も大切だなあと思います。仏教、キリスト教、イスラム教、神道、あるいはある種のアニミズムも含めて、それぞれの関心がことなっていて、宗教という人間的な現象にまじめにむきあって、自由な対話ができることの大切さ。

今回は、終わったあと、なんとなくやすらかな気持ちになりました。また、こういう話題で語り合いたいですね。ありがとございました。大江さんが「ブツダのことば」にこだわる理由が少し分かったように思います。いわゆるお経はパーリー語を漢字に翻訳し、それを日本語に翻訳したものですから、お釈迦様の考えがまっすぐに伝わっているかどうか疑問があります。パーリー語から現代日本語への翻訳が『スッタパーニタ』だったんですね。でも、そこまで遡らないと仏教が分からないと思わせる現代の仏教とは、何？

臨床心理学的に見た『ブツダのことば』(スッタパーニタ)』ということと報告しました。仏教思想は底が深く、三〇分程度でその神髄を説明できるものではありません。しかし、中村元によってパーリー語から直接に現代語訳された岩波文庫本は、大乘仏教を中心とする漢訳仏典とは異なり、私にとっては分かりやすいものでした。ただ内容は難解なインドの哲学ウパニシャッド(奥義書)を前提としているため、哲学的な部分(認識論、唯識)を理解するのは相当骨が折れます。人生苦の克服という心理臨的な面から捉えると、ブツダの慈悲心に直接触れることができ、心が癒されます。私の報告は、臨床心理学とは言いつつ哲学的な説明が多かったので、参加者の皆さんにはわかり辛かったかなと反省しています。ブツダの意図は悟り(解脱・涅槃=永続的幸福)にあるので、そのような高度な境地を求められない人には、余り縁のない話になりました。われわれ凡人は、人生を「苦あれば楽あり」と捉えますが、ブツダは、

人生を苦の生存の連続(輪廻転生)と捉えますから、われわれとは相当問題意識が異なります。しかし、永続的幸福に目覚めれば、ブツダの言う「智慧の意味」(正しい言葉による精神集中・瞑想)を案外容易に理解でき、ブツダの境地に達せられるかもしれない。誰もが最小限の経済的条件下で、正しい知識によって、容易に幸福感で満たせるようになれば、もっと相互理解が進み、利己心にもとづく争いも減少して平和な社会を築けるのではないのでしょうか。(話題提供者 大江)

今後の予定

【第五回】九月三日(祝・土)
【お金って何だろう】

ゲスト：野崎康夫さん(「問答連」世話人)

【第六回】一〇月二八日(土)

【医療から見る「死」】

ゲスト：住田剛一さん(開業医)

会場の一案内

哲学カフェ「問答連」の会場は、毎回「ムレック」にて行います。参加費はワンドリンク注文でお願いしています。

JR京都駅から(約三〇〜四〇分)

市バス二六番『等持院南町』。

市バス五〇番『北野白梅町』下車、徒歩約6分。

京阪三条駅から(約三〇分)

市バス一〇番『等持院南町』。

市バス一五番『北野白梅町』下車、徒歩約6分。

